

第9回JNTO同窓会開催報告

日 時：2018年6月13日（土）11：30～15：30

場 所：慶応大学三田キャンパス南校舎3F〔萬来舎〕

参加者：川井仁史、山之内保、石井昭夫、塩沢潔、北出明、田中五十一、末松睦子、谷口
せい子、谷博子（年次順・9名）

特別参加：間宮忠敏（元JNTO理事長）

ゲスト：井内千穂（元ジャパントाइムス記者）、大西旦（三一書房顧問）、
杉行夫（Japan Now 観光情報協会理事・事務局長）

講 師：ウルシュラ・オスミツカ（駐日ポーランド共和国大使館一等書記官）

配付物：①参加者名簿、②講師略歴、③冊子「ポーランド旅行ハンドブック」

次 第：

1. 代表幹事開会挨拶（北出）

- ・今回はご案内の通り、駐日ポーランド大使館一等書記官オスミツカさんに日ポの歴史やポーランドの紹介をして頂きます。今から昼食をとり、12:30 から約 40 分お話しして頂いて 20～30 分程度質疑を行い、13:40 にはパネルなどを片付け、14:00 には退出される予定です。そのあと 15:00 までを定例会とします。
- ・今後の予定については、10 月にブラジルから上野目さんが一時帰国される機会に拡大懇親会を開催の予定です。その間に定例会を 1 回開催します（後期参照）。
- ・配付の講師略歴と参加者リストにより講師、ゲストの紹介。ゲスト 3 氏はオスミツカさんの話を聞きたいという方々です（時間の許す範囲で各ゲストが自己紹介）。

2. オスミツカさんの講演

【略 歴】

1995-2001：ワルシャワ大学日本語学科修士課程卒、この間日本文部科学省奨学金により鹿児島大学法文学部に 1 年間交換留学。修士論文は「関東軍：起源、構造及び機能について 1905～1945」

2002-2006：九州大学法学部研究生となり、同学部修士課程へ留学

2008 年にポーランド外務省アジア太平洋局入省、2012 年より駐日大使館 1 等書記官、間もなく帰任の予定。

【講演の概要】 壁際に日本～ポーランドの関係史を紹介するパネルを 10 点ほどならべ、パワポにより講演

1) ポーランドの概要紹介

- ・ポーランドはドイツとロシアの二つの強大国に挟まれて歴史的に苦勞してきた。南部国境地帯にカルパト山脈が広がる広大な平原の国。第一次世界大戦後の 1918 年に独立したから今年が独立 100 周年に当たる。日本とポーランドは翌 1919 年に国交を結び、来年が国交 100 周年なので沢山の行催事が行われる予定。
- ・ポーランドはトルコと並ぶ親日の気風の強い国。

2) 日ポ関係の話題

- ・ブランスワフ・ピウスツキ (1866～1918)。アイヌの言語と文化の研究者として著名。1896 年アレクサンドル 3 世暗殺事件に連座してシベリアに流刑され、樺太から北海道に亘り、アイヌについて研究。
- ・日本がポーランドのシベリア残留孤児を救済。シベリアはポーランドの独立運動活

動家の流刑地で、第一次大戦中 10 数万人のポーランド人が流刑地で苦境にあえいでいた。せめて親を失った孤児たちを故国に返そうとしたが、1920 年にロシアとポーランド間で戦争が始まり、欧州諸国は救いの手を伸ばさなかった。それを日本が救出した。その物語は「ポーランド孤児を救った日本赤十字社」(学習まんが・ポプラ社・2016 年刊) および「ポーランド孤児:『桜咲く国』がつかないだ 765 人の命」(現代書館・2011 年刊) で紹介されている。

3) ポーランドの観光紹介 (実用情報と観光魅力)

- ・2016 年ワルシャワ〜東京間に直行便が週 5 便で就航した。
- ・パワポと配布資料により観光魅力について紹介。

3. 初回参加者谷博子さんの近況

恒例により懇親会の初回参加者の谷さんが退職以降の近況を自己紹介。6 年ほど前に退職し、仕事らしいのは松本大学で後期のコンベンション・ビジネスの講義 1 コマを担当しているだけ。20 年前に趣味で始めたチェロの演奏を楽しむのが生活の中心。遅く始めた弦楽器でそんなに上達はしそうにないけど、継続は力なりで、いくつかのオーケストラに参加している。日中交流のために毎年大連での演奏活動に参加しているし、ヨハン・シュトラウス管弦楽団に所属して 2 年前にウィーンに出かけて演奏をした。今年も 3 月に行った。ウィーンにご縁ができ、友達もできた。街を散歩していると、ナチに拉致されたユダヤ人の名前を彫りこんだ真鍮のプレートを沢山見かけ、北出さんの活動とご縁を感じた。

4. 自由懇談 (摘録・順不同)

- ・記録担当: 戦後 JNTO の事業活動を手探りで築いてきたわれわれ世代がもはや「歴史」になりそうな状況だ。記録を残しておこうというのも本会の目的の一つなので、フリーで雑談風にコメントをお願いしたい。

1) JNTO 入社時の思い出

- ・昭和 41 年は学卒採用 4 人で大量採用といわれた。採用時堀木会長と間島総務担当理事の訓示があった。会長は事前に「観光とは」というテーマで作文を書けという宿題を出され困ったが、「観光とは真善美の追求ではないか」書いて出したら、褒められた(笑)。間島理事は、当会の職員は文学部や外国学部の出身者が多いが、これからの観光には経済の要素が重要なので今年は経済学部出身者に重点を置いて採用した、とのことで肩身の狭い思いをした(笑)(北出)。
- ・大阪万国博の開催時に外国人の案内の仕事を探していて JNTO を知った。当時の鈴木寿総務部長に電話して試験を受け、1970 年 7 月に TIC に入った。すでにてんてこ舞いの時期で、先輩に指導してもらおう暇もなくカウンターで慌ただしく応接したが、希望した仕事だったからハッピーだった。産前産後の休暇などの規約も無く、私が最初の例になった。休まれると困るんだとか今でいえばマタハラのようなことを言われたが、その後対応が充実してきた。思い出すことは所長だった松本先生のこと。コレポンを真っ赤に直されたし厳しく指導されたが、私のために新聞切抜きをしてくださったり、非常にお世話になった(末松)。先生のご葬儀で弔辞を読んだ際、「先生…」と言ったきり泣き出して言葉が続かなかった(北出 ― 笑)。松本先生の思い出あれこれ。
- ・大阪で NCR に 2 年ほど勤めたあと父の転勤で東京に戻り、新聞広告の募集を見て TIC の試験を受けて入社した(1974 年)。半年ほど総務部、情報管理部、事業部でお手伝いしてから TIC に行った。前職は営業をやっていて多忙で厳しかったから、JNTO の仕事はスローでのどかだなのと思った(笑)。冬になると海外事務所に「慰問袋」を送る作

業を手伝ったのが印象に残っている。慰問袋の名称が可笑しかったし、梅干しとか餅など袋に入れて発送したのを覚えている（谷）。参加者から慰問袋の思い出あれこれ。

- ・藤田トラベルのインバウンド部門で働いていて JNTO にはパンフレットをもらいに行ったりのご縁があった。職場結婚で退職したあと、学校の先輩（橋詰さん？）が TIC にいてアルバイトに誘ってくれて結局試験を受けて入社した（1972 年 9 月）。2 階の東南アジセンターで働くことになったが、月間 100 時間くらい残業していた前職に比べ、ゆるやかで大変に違う世界だった。

2) 海外赴任の体験について

●初の海外赴任

- ・アメリカの事務所に赴任した人は、カルチャーショックというほどのことはなかったという発言がほとんどだった。当時外国と言えばアメリカで、一般情報も生活情報も多く、日本の延長線上にアメリカがある感じで違和感がなかったが、アジアと欧州への赴任者はかなり勝手が違ったようだ（総括）。
- ・ダラス事務所に行く内命まで受けていたが、国鉄がパリ事務所を設置することになり、国鉄出身の JNTO パリ事務所員がそちらに移ることになり、自分がパリに行けることになった。赴任時の PAR は運輸省出身の所長と大蔵省出身の次長で、想定外の経験をし、赴任はハードランディングだった（山之内）。
- ・山之内さんから引継いだら、土日を含めてダブったのは1週間だけ。例えば日本でいえば、電通、三菱商事、総評などに相当する固有名詞をいわれても「それ何？」というほど常識がなく、旅行案内以外の用件は全部回ってきたので最初は大変だった。固有名詞がわからなくて恥をかくことが多かった（石井）。
- ・地球の反対側のサンパウロが最初の赴任地だった。北米各事務所に立ち寄っていいということで HNL、SFO、NYC、DAL、MEX と経由して2週間かけて赴任した。他事務所のことを知っておくのも必要ということだが良き時代だった。経理担当だったから銀行にはしょっちゅう行ったが、銃をもったガードマンが警備していて怖かった。現地雇員の車で地方に行ったときピストルが置いてあって不安になったことも（塩沢）。
- ・われわれの時代家族の赴任は3カ月後が原則で、赴任地の生活にある程度慣れてから呼寄せることになっていた。外務省に準じてのことだが、民間では同時赴任はなく1年後とかもっと後での赴任が常識だった（塩沢、川井、間宮）。
- ・当時赴任前の夫人が呼び出されて総務担当理事の訓話を聞いた。公機関などの海外赴任者夫人と一緒に受ける研修講座もあり、家族はこれに参加もさせられた（塩沢、石井、北出）。
- ・当時は羽田国際航空からの出発だったが、海外渡航は大ごとだった。JNTO でも特別室をとって歓送会をやった。海外出張の際は各部に挨拶して回った。国際空港では偉い人が海外出張するとのぼりを立てて万歳を叫ぶような風景が当たり前だった（塩沢）。

●女性の海外赴任

- ・1989 年6月に NYC に単身赴任した。赴任が決まった時有馬さんに報告したら喜んでくれた。有馬さんは海外勤務を切望していたのに、女性の海外赴任はあり得ないといわれていた。PATA や ASTA などでお会う人から珍しがられ、夫と子供を置いての赴任について質問攻めにあった。それだけ珍しかったらしい。香港への赴任ではカルチャーショックはなかったが、やはり女性所長ということで珍しがられた（末松）。
- ・NYC と SEL の事務所に勤務した。NYC では違和感を感じなかったのに隣の韓国では大いなるカルチャーショックを体験した。長幼の序とか男女の差別とか…。年寄りはお店で大勢並んでいても無視して入って行くし、お酒は目上の人の前では横を向いて

飲まなければならないとか…。女性の所長が来たということでもてた一方、興味の対象とされた。女が一人で食事していると、よほど性格が悪いかわれられているかだ、という雰囲気だった（笑）（谷）。

関連して間宮さんが日本郵船の若手時代（昭和 42 年）に韓国との間で問題が生じて交渉に行かされた時の経験談を語られた。まだ戒厳令の時代で銀行の前にはカービン銃をもった兵隊が並んでいたし、米抜きでコーリャンを食べる日があった。当時は漢字交じりのハングルを使っていた。日本語が大変上手なのに、日本語はしゃべりたくないから通訳つけろというなど、まだ反日的だった。韓国人の男性とえば、今のイケメン風の人はほとんどおらず、赤ら顔でごつい感じの人ばかりだった。

- ・香港に赴任した。やはり女性の所長は珍しがられた。マスコミにしる業界人にしろ沢山知己をつくって利用させてもらった。業務報告の「概要」を書いたり、人さまに物事を説明するのに、韓国だと政治が関心の対象になるけど、香港の場合は圧倒的に経済の話題が中心になる。現地語の経済用語の知識も乏しかったから、勉強するよりわからないことはすぐに現地の知人に訊ねて知識を仕込んだ。予算が厳しい時期でパンフレットも補充されず、「弾がないのに鉄砲撃てというのかい」という時代だった。口と頭で勝負した。香港は近いからインバウンド業者とかは独自に活動するようになってきた時代で、JNTO は必要とされるのかなと不安な思いをしたこともあった（谷口）。

話は尽きず、1 時間の予定を会場側に 30 分延長してもらったが、それもあっという間に過ぎて、二次会的に有志が近くの焼き鳥屋で懇談を続けた。

4. その他（連絡事項）

1) 平田真幸会員のご逝去

懇親会の翌日に平田さんが亡くなられたとの連絡があり、連絡網経由で流したところ OB 並びに JNTO 現役の方々多数が 14 日（月）の前夜式と 15 日（火）のご葬儀に参列された。東洋大学に勤務されてこれからという時の早過ぎるご逝去でした。謹んでご冥福をお祈りします。

2) 今後の予定

●次回の会合

日 時：2018 年 8 月 18 日（土） 11:30～15:00

場 所：慶応大学三田キャンパス南校舎 3F [萬来舎]

ゲスト・スピーカー：JNTO の鄭さんをお願いしました。

- 10 月中旬に海外会員の上野目さんが一時帰国される際に、拡大懇談会を開催する予定で準備しています。

文責：石井昭夫記録担当幹事